

巻頭言

特集 次世代の「看護医療」を探る

小松 浩子

慶應義塾大学看護医療学部長

小池 智子

慶應義塾大学看護医療学部准教授

慶應義塾の看護教育は、1918（大正7）年4月医学科附属看護婦養成所の開設に始まります。「慶應看護100年」という記念すべき時に、KEIO SFC JOURNALにおいて特集を組むことができました。社中の皆さまにこの喜びと感謝をお伝えし、厚く御礼申し上げます。

ここで短く慶應看護100年の歴史を概観したいと思います。

慶應義塾の看護教育は、福澤諭吉先生の教えに導かれて発展を遂げて参りました。慶應義塾「修身要領」における第14条には、「社会共存の道は、人々（にんにん）自ら権利を護り幸福を求むると同時に、他人の権利幸福を尊重して、苟も之を犯すことなく、以て自他の独立自尊を傷つけざるに在り。」とあり、これはまさしく、看護医療の根本である人間の尊厳を守ることと言えます。塾という学び舎でこそ人を慈しみ、尊ぶという人間性を涵養する看護教育の継承が可能となっているのです。

1920（大正9）年の慶應義塾大学病院の開院に先立ち、1917（大正6）年に大学部医学科が開設されましたが、初代医学部長北里柴三郎の「病院の良否を左右するものの一つは、看護婦である」という卓見により、看護婦養成が開始されました。福澤諭吉を「我が科学の扶植者」「余が事業の保護者」とし、その深い交流から精神的教訓を受けてきた北里柴三郎は、運営していた養生園¹⁾に看護婦学校を1897（明治30）年に開設し、『普通看病学』²⁾に序文を寄せるなど、近代的看護教育にも関心を寄せていたのです。

北里先生は、生命を救い、癒し、回復するために看護の役割は必須であり、

その質をもって病院としての機能が評価されることを見抜いておられました。看護婦養成所における教育は、看護の役割の重要性を理解した医学部教授陣により、厳しく、熱意を込めて行われました。教育のめざすところは、高度の専門知識、技術のみならず医療に携わる専門職としての責務と使命を養うことにあったといえます。

第1回生は60名の志願者から54名が選抜され、修業年限2年、義務年限2年で、入学金・授業料はありませんでした。芝白金三光町の養生園内に設けた仮の寄宿舎に寄宿し、養生園と北里研究所の施設で講義や実習が行われ、翌年からは四谷に移転して、看護教育が展開されました。

初代看護婦養成所所長・北島多一のもと、日本赤十字の看護婦養成の経験が豊かな医師、尾崎市太郎を招き、初代看護婦養成監督には日本赤十字中央病院より鈴置けいが着任し、同病院の婦長数人がこれを助けるという陣容が備えられました。教育は、看護の役割の重要性を理解した医学部教授陣により、厳しく、熱意を込めて行われました。そこでは、専門知識や技術のみならず、医療に携わる専門職としての人格の陶冶が教育の目標に据えられ、職業としての独立、個人としての独立の上に成立する看護婦像を大切にしていたことが窺われます。「病院は患者本位」を旨とする病院開院にあたって、このような看護婦像は不可欠でありました。

北里柴三郎先生が期待した看護の役割は、戦火にあった病院における看護婦の姿にみることができます。昭和24年の紅梅会誌の記事には、「無数の焼夷弾および焼夷爆弾投下のため数か所に火災がおこり、病院本館および細菌、薬物、解剖等々の教室、寄宿舎など木造建築のほとんどが短時間のうちに焦土と化してしまった。しかし、烈しい空襲下において火災前に遺漏のない処置がなされ、一名の負傷者も出さずに完全に避難することができた。」と記されています。たとえ、極限下にあっても冷静に勇敢に、医師とともに尊い命を誰一人失うことなく救うという専門職としての使命が全うされた姿がありました。

自他の尊厳を守り、何事も自分の判断・責任のもとに行うことを意味する「独立自尊」、科学的な姿勢を表わす「実学の精神」。福澤が標した慶應義塾の理念は、このように看護教育にも脈々と受け継がれていくこととなります。

その後、慶應義塾における看護教育は、「各種学校」「専修学校」「看護短期大学」という変遷を経て、21世紀初頭に、「看護医療学部」へと発展し、100年間の歩みを続けてきました。「独立自尊」を看護の根本に、専門職としての責務と使命を看護の役割として実践するために、看護教育は、臨床判断力や科学的思考の獲得・強化がなされるとともに、看護の本質ともいえるケア、すなわち、「一人の人格を尊重し、慈愛のもとに人を気づかい世話をすることで、その人が成長すること、自己実現をすることをたすける」という実践を大切にすすめられてきました。看護の本質については、1957（昭和32）年に小泉信三先生が慶應看護の行動指針として贈った「愛スルモノハ強シ」という言葉に象徴されています。人を愛することは、その人の痛みを自身のこととして感じ、それゆえに、人の喜びを自身の喜びとすることができ、それが、人間に与えられた幸福であり、そういう心を養うことが、人を気づかい責任を引き受けるという人間的な強さにつながることを意味しているのではないかと思います。小泉先生の教えは、慶應義塾における看護教育の理念として今後も受け継がれるものです。

慶應看護の新たなステージを迎える今、急激な少子高齢化に伴う人口構造の変化、疾病構造の変化、グローバリズムなど、われわれを取り巻く環境や社会は、大きな転換期を迎えています。環境、社会の激変は、世界の繁栄と安定に不確実性や危機感をもたらしています。だからこそ、看護教育は看護の役割と本質を見失うことなく進める必要があります。一方で、このような大変革の時代を生きるには、既成概念に捉われることなく、新しい状況を正確に把握し、自らの成すべきことを的確に選択することができる人材の養成が求められます。そのためには、高度な専門的知識や技術はもとより、正解のない複雑な課題を解決するための高度な認知的、分析的、および問題解決の能力、真実への敬意と倫理観の涵養が必要です。まさしく、科学的、実証的な学問である「実学」を根本とする看護教育が必須となっています。

グローバルな視点から健康課題を捉え、資源を有効に活用して、「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する。」Sustainable Development Goals (SDGs) が国連主導により進められています。これから

100年の健康社会には、地域のストレングス（強さ）やレジリエンス（回復力・強靭性）を促進するためのコミュニティケア、多様な医療・ケアをシステムとして繋ぎ効率的に提供するためのケアシステム開発など、看護学のほか、異分野との融合による戦略・萌芽的な理論や方法論の開発が不可欠です。看護・医療・介護・生活支援・環境改善等を貫く理念とそれらを具現化する理論・方法論の開発には、過去、現在の事象やデータに基づいて未来の健康社会を見据え、多元的なケアを創生・統合する異分野融合研究を推進できる若手看護学研究者の育成も急務と考えます。

人類がめざすべき持続可能な未来社会の実現に向けた個々人の取り組みは、強靭で豊かな人間性の涵養を抜きには実現できません。それゆえ、深く思考できる時間や空間の保証、多様性や異質性の中で創造性や独自性が育まれる教育環境の整備が急務です。幸運なことに、我々は、福澤先生が「学問に凝（こ）る勿（なか）れ」と述べておられる、相対的に物事を捉える姿勢に立ち返ることができます。新たなチャレンジが求められている時代であるからこそ、福澤先生の教育理念に常に立ち戻りつつ歩を進めていかなければなりません。

本特集号は、未来の看護を切り開く研究・活動の内容を網羅しています。さらなる100年を拓く逞しい看護の行方を示すものとなりました。本書を手にとった皆さまから、未来の看護を切り拓く新しいアイデアや、多様なつながりが生まれることを祈念しています。

注

- 1) 養生園は、1893（明治26）年に福澤が北里を支援してつくった結核の治療・療養の施設である。
- 2) 『普通看護学』（1895）は、ウィーン大学の教授であった外科医、ビルロート（Christian Albert Theodor Billroth, 1829-1894）が記した *Die Krankenpflege im Hause und im Hospitale*（1881）を佐伯理一郎が翻訳出版したものである。原本は1881（明治14）年に初版が発行されて以降、版を重ね、他国語の翻訳本も多く出された。